原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百九十号

原告団レポート

遺族――

坂本ミキエさん

三池闘争中、情宣の帰り自宅裏で。

S33年に山鹿で。夫婦そろつてのめずらしい写真。

とにかく誠意がない！

勝訴で、早く終わらせたい

ようやく落ち着いたこの頃

久福木の自宅で、二人の孫さんとともに。

大間山の麓

「ここに引越してきてから、もう十四年たちました」と語るのは、昭和三十八年十一月九日の、三川鉱大爆発による遺族のひとり坂本ミキエさん（六十六歳）。

ここは、大牟田市久福木九二五の一二で、目戸原団地といわれるところ。それまで長い間住んでいた、同じ市内の三川鉱に近い、小浜北社宅から移り住んだのが昭和四十二年。いまは、長男夫婦と孫ふたりの五人家族。

当時、息子さんたちのすすめもあり、協力して労住の建売住宅を購入したのである。

このあたり、畠と山ばかりという風景がひろがっていたのだが、例外なく、住宅地として周辺はだいぶ建てこんできたが、なにせ大間山の麓のこと、もうこれ以上は増えそうにないだろうとのこと。

この団地のすぐそばには、星塚堤、長浦堤などの堤が点在する。

坂本さんも、春の季節には、わらび、ぜんまいなどの山菜摘みによく足を運ぶそうである。

一緒に住んでいる長男の勇さんは四十四歳、奥さんは清美さんといい三十一歳、ともに市内の某ミシン会社に勤務。ふたりの孫は、男ばかりで雄二くん（小学四年生）、剛くん（小学一年生）という。

朝鮮へ移民

爆発で命を奪われたとき、坂本与七郎さんは五十一歳（大正元年生まれ）。ミキエさんが四十七歳。ふたりは、ともに農業移民の子として幼くして朝鮮に渡った。与七郎さんが二歳、ミキエさんは六歳のときだった。ともに玉名郡（熊本県下）の出身である。

坂本さんたちが渡鮮した時期といえば、第一次世界大戦が終結した。

「昭和二十年十月。太平洋戦争の敗北による終戦直後、親戚五家族で、およそ二年半は汽車での通勤。駅までは当然徒歩で「常一番だったんですが、朝四時ごろから家を出よりました」

「炭鉱に入って、とにかく給料がもらえるのでほっとしました」と語る坂本さん。それでも「炭鉱のことは全然知らなかったし、危いとかはあまり考えなかった」と述懐する。

終戦直後の不安定な情勢と、なにより食べることに追われるありさまは、いずこも同じ、「マルタン」は大きな魅力だったに違いない。

なんとしても遠い。それに大浜の家も借り住まいである。やがて一家は小浜北社宅へ。そして四男敏雄さんが誕生する。

三池炭鉱へ

大浜という、もと飛行場のあった辺りで、荒田を借りて農業をはじめるのだが、これがまた大変だった。まず道具がないので親戚から借りる。畠は遠いし、いきおい夜中の畠仕事をしなければならなかった。

夫の与七郎さんは「そんな畠仕事の間にも、貝を掘ったり、魚の行商をやったり」したという。生活は苦しかった。

この時期に、たまたま親戚の人が炭鉱に勤めていたので「炭鉱へいかんか」ということで、思い切って農業をやめ三川鉱へ。与七郎さんが三十五歳のときである。

小浜北社宅六棟に移り住むまで、およそ二年半は汽車での通勤。駅までは当然徒歩で「常一番だったんですが、朝四時ごろから家を出よりました」

「炭鉱に入って、とにかく給料がもらえるのでほっとしました」と語る坂本さん。それでも「炭鉱のことは全然知らなかったし、危いとかはあまり考えなかった」と述懐する。

終戦直後の不安定な情勢と、なにより食べることに追われるありさまは、いずこも同じ、「マルタン」は大きな魅力だったに違いない。

なんとしても遠い。それに大浜の家も借り住まいである。やがて一家は小浜北社宅へ。そして四男敏雄さんが誕生する。

三池闘争で

「家では無口であまり話はしなかった」というのだが、人前では結構話す人でもあった様子。仕事の方は、いわゆる「がまだしもん」でよく働いた。

三男の徹さんが耳が悪かったので、久留米のろうあ学校へ行くことになり、月謝も高いし、常一番の仕繰では生活ができないと、与七郎さんは採炭工となる。激しい労働のなかでも、海に行くのが楽しみで、ボラの引っ掛けや、ガネ（蟹）とりなどによく出かけた。

酒は飲まなかったが、その後の闘争中にかけて、山登り、マージャン、碁、将棋、小鳥や金魚の飼育など、とにかく趣味の方も間口がひろかったが、いずれも長続きはしなかったようだ。

ただ、どうしたことか「子供にはやかましかった。それで子供たちはあんまり好かんかったようです」というが、これは厳しさの一面を伝える。

昭和三十一年の六十三日のストライキの時には、あちこちに地域の人たちと出かけ、地金拾いなどしてがんばった。

そして、激しく炎を燃やした三池闘争へ。このなかでも丸刈り頭の与七郎さんは、地域で、ホッパーへの動員などでがんばり抜いた。

そのころミキエさんは、主婦会の小浜北分会の分会長として活動。分会の切りまわし、オルグの世話や情宣、動員と走りまわったが、当時をしのぶアルバムを拝見すると、ミキエさんの活動を伝える写真ばかり。写真といえば、与七郎さんと写ったものはほとんどなく、なぜか与七郎さん自身がアルバムにはあまり登場しない。

無惨・爆発

その日、与七郎さんは二番方で出勤。ミキエさんは近所の永野さん（CO患者で定年退職）の家にいた。

ものすごい音がしたので、永野さんの奥さんと戸外に飛び出してみると、みんなが広場で騒いでいる。この時、三川鉱のあたりにあのいまわしい「キノコ雲」をはっきり見た。

夫の安否は夜になってもわからず、天領病院を捜しても見つからなかった。不安の一晩を三川鉱の前の三川支部で過ごす。「もう駄目か」とも思ったし、「なにごとも用心する夫だから」と思い直してもみた。

翌十日の朝、連絡を受けて本社の体育館へ――。

すでに亡骸となった夫と対面。

「あの時のことは、なんともいえません。いいようがないんです」

十二日の夜になって、ようやく久留米で火葬。葬儀が終わっても「なんとなく夫が帰ってくるような気がした」、そして「こんなことをした会社に憎しみがわいてきて」とかみしめるように語る。

子供たちが、すでに成人していたことが、せめてもの救いだったかも――。

縫製工場へ

爆発後、町工場で働いていた二男の博さんが数少い入替採用で三川鉱へ（現在坑外仕上工、四十一歳）。ミキエさんは、三十九年四月から遺族のために造成された縫製工場へ勤めることになる。

工場での勤めは検査の仕事で、あまりきついとは思わなかったというのだが、ともかく病気もしたことがないという、強い体のせいかもしれない。同工場に七年三ケ月勤務したのち、孫の面倒を見るために退職。その孫たちも、どうやら手のかからないまでに成長した。

長女の信子さんは、大川の建具店へ嫁ぎ家庭を持ち三児の母親。三男の徹さん、四男の敏雄さんはともに東京で暮らしている。

この頃になって「ようやくゆっくりした感じ」だというのだが、一昨年、急に背中が痛くなり病院通い。原因不明とか。それまで趣味として〝さづき〟を五、六十鉢丹誠して作っていたが、いまはぼつぼつしかできないとのこと。

趣味の旅行も、遠出は年一回程度。いままでに北海道、沖縄、四国とまわり、今年は六月に東北に。近辺にはグループでよく出かけるとのこと。月一回の高塚地蔵参りも。

裁判の中で

七月二十四日の裁判傍聴にも行ったが、年に二、三回は参加する。ともかく「自分たちのことだから」と熱意を持っているが「早く勝訴で終ってほしいと思うが、まだかかりそうですね」

「とにかく会社の誠意がなさすぎる」と。

あの炭じん爆発からやがて十八年、裁判提訴からすでに八年半。それぞれの重たい人生と、苦しみのなかから、これからのたたかいに、ねがいと祈りをこめて生きている。